

# 05年サバ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数				量										
	漁獲地	輸入	輸出		消費地				在庫	加工品				消費支出 生(千)	
			生	冷	生	冷	塩干	塩蔵		缶	干	蔵	節		
16	338	237.3	101.0	25.7	2.1	50.3	18.9	5.5	13.6	74.7	29.0	30.2	12.9	1,509	
17	604	515.9	95.1	58.4	2.3	47.5	19.4	4.8	11.4	102.2	27.0	27.9	12.1	1,468	
%	179	217	94	228	106	94	103	88	84	137	###	93	92	94	97

年	価 格								
	産地	輸入	輸出		消費地				消費支出 生(円)
			生	冷	生	冷	塩干	塩蔵	
16	95	199	75	272	327	351	410	461	1,337
17	56	275	63	275	327	423	449	528	1,274
%	59	138	84	101	100	121	110	115	95

## 漁獲と資源

17年のサバ類(マサバとゴマサバ)の漁獲量は、60.4万トンで前年(33.8万トン)を大幅に上回り、近年の平均(50万トン)をも上回る漁獲であった。

これは、北部太平洋海域を始め日本周辺海域での漁獲が好調で前年を上回ったことによるものである。

マサバ太平洋系群の資源量は1970年代には400万トン、1980年代前半は150万トン程度で推移したが、1980年代末に再生産成功率(RPS)の低下に伴う加入量の減少と強い漁獲圧により減少し、近年では低水準にある。産卵親魚量(SSB)は1980年代中期の50万～60万トンから1990年代には5万～12万トンへと低下した中で、1992年に加入量28億尾、1996年に43億尾の卓越年級群が発生したが、未成魚(0、1歳魚)の多獲によりSSBは回復しなかった。SSBは1997年に過去最低の約5万トンとなったが、2004年のSSBは約11万トンとなった。2004年級群の年級豊度は近年では比較的高く、約20億尾と推定された。しかし加入量当たり漁獲量の観点からは、漁獲開始年齢を現在の0歳から1歳魚へ引き上げる必要がある。さらに、魚価や繁殖への貢献を考慮すると漁獲開始年齢を3歳とするのが望ましいとされている。

対馬暖流系群の資源量は1973～1989年には110万～160万トンで比較的安定していた。1987～1990年にかけて減少した後、増加傾向を示し、1992～1996年には160万トンを超える高い水準に達した。しかし1997年以降、資源は急激に減少し、2003年は65万トン、2004年は77万トンと低い水準に留まっている。加入量は1995年以降減少傾向が続いており、2002～2003年にはさらに低い値になったが、2004年はやや持ち直した。親魚量は1996年を近年の頂点に2000年まで減少し、2000～2004年には横ばい傾向にある。再生産成功率は1999～2001年には高い値を示し、2002～2003年には低い値を示したが、2004年には再び高い値になった。

何れにしても両系群とも資源水準は低位であるため、産卵親魚の保護や漁獲年齢の引き上げが望ましいとされている。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源は1995年以降では1996年が360千トンで最も大きく、1997～1998年に減少し、1999年は増加して300千トン、2000年は320千トンと推定された。2001～2003年に資源量はやや減少し、270千トンとなった。これは、近年では1996年級群が卓越年級群であり、1997年と1998年の加入量は少なく、1999年級群が多かったことに

よる。2004年級群の加入量は1996年級群に準じると推定されるため、2004年の資源量は320千トン程度に回復したと見られる。

また東シナ海系群のゴマサバの資源は、1992～2004年に比較的安定して同程度の水準を保っている。加入量は1992年以降、多少は変動するものの、おおむね同程度の水準を保っている。親魚量は1992年以降において、同程度の水準を保っている。発生初期の生き残りの良さの指標値になると考えられる再生産成功率は、時折（1993、1997、1998、2001年）高い値となるが、その他の年は比較的安定している。

### 産地水揚量と価格(継続漁港)

17年の産地水揚量は、51.6万トンで日本周辺の主立った海域での大幅な漁獲増加を反映し前年（23.7万トン）を大きく上回った。

価格は、水揚げ増加を反映し56円で前年（95円）をかなり下回った。

これは、各海域とも大幅な漁獲の増加を反映したものである。

### 海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量の特徴は、引続き三陸、常磐での増加が際だっている上に、各海域とも幅はあるものの増加を示した。なお道東海域で平成年代に入って初めてまとまった漁獲がみられた。

### 海域別漁獲量（単位：1000トン）

海 域	16年	17年	対比(%)
道 東	0.0	3.4	
三 陸	31.3	88.3	282
常 磐	41.7	195.8	469
東 海	48.9	77.1	158
薩 南	11.9	30.1	252
東シ海	89.3	113.1	127
山 陰	11.2	18.0	161
その他	2.6	3.5	137
合 計	237.3	515.9	217

### 三陸(単位:1000トン)

月	16年	17年
1	0.0	1.1
2	0.0	0.2
3	0.0	0.0
4	0.0	0.0
5	0.0	0.0
6	0.5	0.6
7	0.6	4.6
8	5.8	15.3
9	12.8	24.0
10	8.5	31.0
11	2.2	7.9
12	0.9	3.5
計	31.3	88.3

MAX H53 69万トン

### 常磐(単位:1000トン)

月	16年	17年
1	0.4	12.1
2	0.2	5.5
3	4.8	26.1
4	1.1	27.9
5	1.2	14.5
6	2.0	19.1
7	2.6	9.3
8	2.4	0.7
9	3.0	9.4
10	2.1	18.7
11	4.3	24.0
12	17.6	28.5
計	41.7	195.8

MAX H6 14.1万トン

### 三 陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年同様若干の漁獲であったが、南下期は前年を大きく上回る漁であった。

本年は5月下旬から6月上旬にかけて定置網に入網がみられ始め、昨年より1旬早く7月下旬に三陸中南部でまき網によるサバの初漁があり、8月から10月にかけてまとまり昨年を大幅に上回る好漁となった。また本年も7月中旬からまき網によるスルメイカの漁獲が始まり9月まで続いた。

魚体は、8、9月には1歳魚(2004年級群)主体に時には2歳魚(2003年級群)、3歳魚(2002年級群)も混じっており、定置網では型の大きいマサバの漁獲も目立った。

また、本年のブリ(イナダ、ワカシ)の漁獲が10月、11月に集中的にみられたが、漁獲量は良かった前年には達しなかった。

### 常 磐

本年は昨年とは違って越冬サバの時期に非常に好調で昨年を大幅に上回った、結局越冬寒サバは71.6千トンで前年(6.5千トン)を大幅に上回った。

また、春(5~7月期)の北上期の漁獲も42.9千トンで極めて悪かった前年(5.8千トン)を大幅に上回った、南下群の漁獲は71.2千トンで前年(24.7千トン)を大きく上回った。なお、本年も11月以降にブリ類(イナダ、ワカシ)の漁獲がみられたが、昨年を上回る好漁となった。

魚体は、越冬期、北上期には1歳魚(2004級群)、南下期には1歳魚主体に2歳魚(2003級群)であった。

### 東 海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、54年の17.7万トンをピークに減少しており、近年は1万トン以下の低調な漁獲で操業隻数も往時に比べ大幅に減少している。本年は隻数も更に減少し、漁獲も3,752トンで近年でも最低の漁獲に終わった。

17年の漁獲量は、マサバが141トンでやや漁獲があった前年(57トン)を上回り、ゴマサバが3,752トン(前年6,211トン)でマサバが僅かながら3倍増、ゴマサバは半減した。

東シナ海(単位:1000トン)

月	16年	17年
1	8.6	10.6
2	4.9	6.4
3	2.8	5.8
4	2.5	6.0
5	2.3	4.0
6	2.1	5.1
7	2.3	3.8
8	2.3	6.3
9	6.9	9.7
10	9.8	20.5
11	23.9	21.5
12	20.8	13.4
計	89.3	113.1

MAX H 8 22.2万トン

山 陰(単位:1000トン)

月	16年	17年
1	0.9	3.3
2	1.8	1.3
3	0.5	0.7
4	0.7	0.3
5	0.8	0.1
6	0.5	0.0
7	0.5	0.2
8	0.2	0.4
9	2.3	1.5
10	0.3	4.5
11	2.3	3.4
12	1.3	2.4
計	11.9	18.0

MAX H 6 14.1万トン

## 東シナ海

17年の漁況は、年明け後の冬漁は前年来の好調な漁を反映し前年を上回る水揚げとなった。また夏場の漁も例年通り夏枯れを呈したが、昨年をやや上回った。その後の秋漁は昨年同様9月以降まとまり始め、10、11月と好調で昨年並みの漁で水揚げも同様であった。したがって年間の水揚量も前年をかなり上回った。

魚体は、本年も概ね300g以下のギリ、ローソクサバ（1歳魚）が漁獲の主体で約71%であったが、前年（66%前後）より多かったが、盛漁期の11月には500g前後の真サバが4割程度混じって漁獲された。

## 山陰

この海域では、閑漁期の夏場が低調であったが、年明け後の漁、秋漁とも前年を上回ったことで水揚げも好調であった。

本年の漁況の経過は、年明け後の漁は前年をやや上回ったが、その後の梅雨期から夏場に低調に推移した。しかし夏場以降の秋漁は、昨年を上回って推移した。

魚体は、上半期は2003年級群主体に、後半には2004年級群が主体であった。

## 輸 入

本年の輸入量は、9.5万トンで、前年（10.1万トン）を引続きやや下回った。これは主にノルウェー現地の漁獲枠減少を反映したものである。本年も搬入のピークは11、12月であったが、年頭初（昨シーズン）から春先にかけての原料も多くなっており、この月のシェアは少なくなっている。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーが75%と高いシェアだが、年々シェアを落としている。また、それ以外では特にカナダ、イギリスの増加が目立ち、それぞれ6599トン（前年3018トン）、6378トン（前年2433トン）、アイルランドが3485トン（前年3477トン）、中国が1473トン（前年2022トン）であった。

本年のノルウェーからの輸入原料は600サイズ以下が87%（前年：67%）主体に600UPが13%（前年：33%）で、600UPが引続き前年より数量、シェアとも大きく減少、4-6サイズの増加となっている。また最近では600gUP、4-6サイズとも日本とロシア、中国との買値の競合関係が顕著になっている。

価格は、275円で前年（199円）を引続きかなり上回ったが、ノルウェー現地市況の高騰を反映したものである。

また、中国等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年は9,982トンで前年（9,426トン）をやや上回っているが、伸び率は止まりつつある。

## 輸 出

本年の輸出量は、5.8万トンで前年（2.6万トン）の引続き倍増ペースが続いている。これは北部太平洋、九州地区等のサバが中国を始めタイ、パプアニューギニア、フィリピン、韓国等アジア諸国に大きく伸びたことによるものである。また、缶詰輸出は2.3千トンと史上最低の水準であった前年（2.1千トン）をやや上回った。

## 在庫量

在庫量は、10.2万トンと前年(7.5万トン)をかなり上回った。

これは、国内生産量の大幅な増加を反映した結果である。

## 消費地入荷量と価格

17年の消費地入荷量（10大都市）は、水揚げの漁獲の割には型の小さいのが多かったことを反映し、生鮮4.8万トンと前年（5万トン）を上回った。

また、冷凍は1.9万トン（前年1.9万トン）、塩干4.8千トン（前年5.5千トン）、塩蔵1.1万トン（前年1.3万トン）と総じて減少傾向が顕著であった。国内物については魚体が小さかったこと、海外物については原料輸入が減少したことを反映したものである。

価格は、生鮮327円（前年327円）、冷凍423円（前年351円）、塩干449円（前年410円）、塩蔵528円（前年461円）であった。

価格は、輸入原魚価格が上昇した結果、冷凍（総菜物原料）、製品である塩蔵（塩フィレーや切り身、塩サバで利用）、塩干が顕著な上昇で、鮮魚が横ばい推移であった。

また、本年も消費地市場、末端のスーパー・量販店では、国内漁況を反映し、ゴマサバ主体の鮮魚販売、塩蔵はフィレーから切り身販売の転換が目立ったが、消費支出は金額、数量とも減少した。